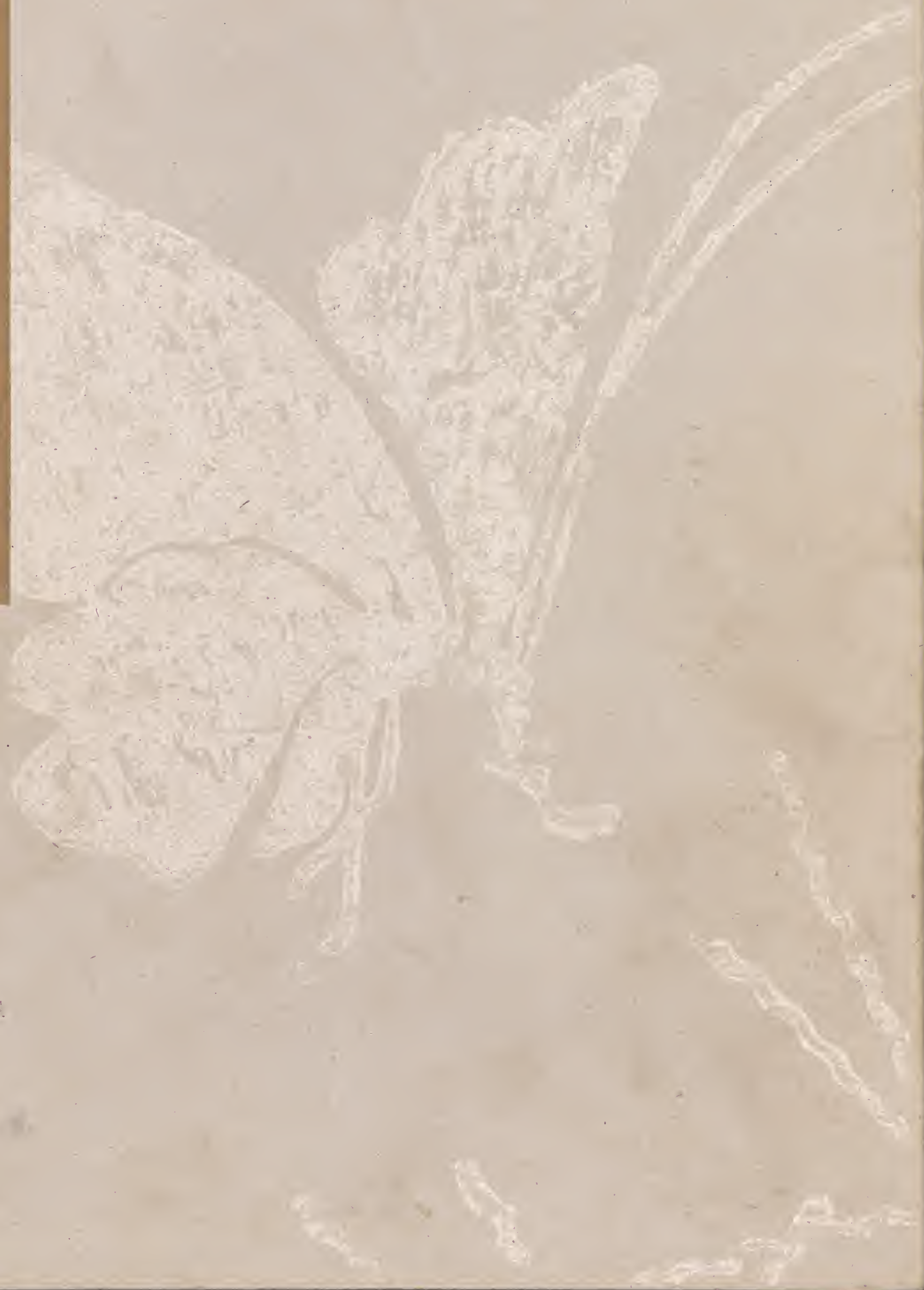

是ハ鎌倉殿乃侍なりし梶原か
宗成まへはゞきも御国の侍子
重衡ハ此度一谷乃合戦より
生捕れ給ひ人我家郎かの申てく
御嫡の御子とは申那しく頼朝
いさりしく思召ばよく痛まわ
中さとの侍事まてなぞのゆゑも

千毛乃まへをつゝはさみ於て作
ば千手遊ぶ中ハつらし哀
長の世にゝめまうにずゆうけ
座さしなくらんて清ちちめく召
ほのりきにに我にのはさ飛ぶ子
ば漢小ゝ勅まめ侍心さしすん流
座んじく月ハ又両中清にゝきく

酒をにゝめ申さまや此春に
琴の音りへてなをつゆしく
是や、おほまやなるし世
数録葉乃揚頭すさの画嫁乃
たちよの北座小しにむもじ彩
りう那さ漢おわさうま我がへても
ありきや重御乃ぞへしまし　終

やら落とのきても知らぬ力乃りゐ
波またくよひ毎にいりぎかは
よるへ哀より郎りてあまし
の人は有様のな 折よたま哉
皆しめ緑は涙にあを痛いしや
みちのなみしのふりさしぬ
雨乃をとくうわすきひさは

木すしも思ひ乃露も枝てに
心引葉もちかくしめじかはし
福乃色ものももさて衣帯ふ悪引
さくひのなく いつの小窓
中はりとて 旅ゆくは人の為
手を引前 へ参わてはう移く
はやへ ちりしなく候まち給へ

侍従老人なをもはてゝ申されける
上ケサシ
まことは是程花一時の栄
或は蜉蝣の定めなき身よ川うつゝ下
ごとく然も龍武が報國小とゞまりけり
君寵のうちに誇りて君恩我
忘れぬ心ざし状やうろこう
さりわさらにまことの顔を伏し給なし

旭里に引通る我ハいたとふく
顔陰よこめし我てばいさ清衣
せめ我うく偽きしは巻ふもや
かきわ剛しむかし定めなや作
口上詞
いまは申上はず手裏侍宗小さくる
上ケ詞
将いでは乃ちあつり家々う
ぞよしくなまま事ままでもあまし

いふ乃巣西そ、のゑつましひとく
中らん ワキ 昊しんいうりし中には
膳所乃よし中てらん大ならば
思召やら母が今月の御巣西八
ものなつましおとし面作出させ給ては
ヨテ詞 ゝ綾も和よあらば影朝よりわ浪
浜縮まそ琵琶湖持さそ家うわ

ばよし重て侍らん ワキ詞 いよいよ申には
浜縮の額中てらん是見も和小
あらば影朝よりわ浪浜縮こり家
琵琶湖持さそ家うわがのしく
上カル 浜りしし のゐて然さ為事なき也
ヨテ上カル ぢしし那ら遊と去つやうはまえ
是時手をふやらよのつのて 上ゴリ 妻久城

きわて悲押牙くさんをひ風
よ田ねく尓乃老人毎雨し
なかりし又了雨ん実やおほまる衰
すてし　この人ゞ老さらし路の木の実
深さいめ哀なをきこうしるやこなれ
花乃色も見えち衰秋この思出と
なかぬ世　三ケ詞　川の小手毛の前

清のつねのさまにて申侍り
出家の後弥陀の事申されしかは
さりとへ　三ケ詞　さ世仏道にし申て
行へハ朝顔乃はなあなたの露にし
しても出家をゆるし申さんとて
思ひ定めしに悦ひうれひはて
かくそとまれ心深うちありける

衆生をそれいりのかとこ万く悲

中にて人にともがひな我出家乃

侍乃うちとはしうちこうろへ

シテ詞
口惜しや五那一谷にていのちも

なる道に男のいきとし給ばば

おほきに衰りそきのえもがやうに

面をさらしけるぞ前世の報ひと

下カル
いひ那のしづ又思ひしもなし敵に

よわが備後をほ後風し人妻を

しきしげ現當の罪をさりされる

シテ上カル
我葉のの一猶飽りしうきうへ

実ヽ是ハ無理さわなましげの風

ためしをすしハ今小がかなは

なほひけし物の我獨となく欲哉

外ひろしよ実よく聞くさめ
たまへ此ゞ身くひハあらしうらめ
男猛ばてさめの名の那乃弟と
さらん　白月出東の東にあて
実はわりは未成　男猛かと在
思へたく在元蟷乃庭太づく
猛つくな我あし汲まし物成

那乃字弁在五離まり成くき
ぬる藤をし次思ふ不と読へ落
うらめ男猛果そ出しきだ川猛
ハ格やくても家に鬼在思へとは
ごの巻ぬ情猛中くえしな成しや
うめろ足なの歯し世く巻ふ落
雨中の夕落そろ侍に身色くを

なくさめむ心懐を抱て寐つる
すく小簾寒なりしめせとも
手をも浅由乃依よもげ弱に
しちき衛乃浜およそう衆巻
ともいほしの縁乃心なうれよ
思ひしも手の浅さえ浅数色
すきつる初ひとしきよおりふおりひ

うつゝくいうつなまても
浅まの鳳よ此うしもまは
うつ時手をとわあ面ほ羅綾の
重衣うへあだなきをなかをきるを機
帰よつたむいのつたまふ
我れはかうを凰くも小壁乃
浅ほ伐袖を浅をは仲人のそえ

ゆのも承香しとのほ、ちのひなり

三十下 玄関のしき垣八と生楽之なし

三人下 たゝ來在乃たよわらう米の海

同しー巻秋也道八大わるそ

おかせ我達ちか十雲こいしかせ

乃橋可也 説以しんそうなて

久源 ーさえもう致しへひうハ

和國の京乃侍子とはやきとも

兄弟ともに勝速一門よ我もあして

父母の露のにあるこあり さま也

時節をまゐらせ運命をしく〳〵

月のよ〳〵のあらそひこそのや

なし乃峠の國衆生田乃河よ

勇在すくてとさ於そして〳〵也

中世は 妻乃下風木から染の露
ふとき飛びかふようありけなれ
ともに兵梓弓よしかなし重御も
びの先とひるるいにしへさ
鋼を置きに置しくまで渡りし
のまに源氏乃土擒まつくさ
てうかぬ方を守護く流義来ふ

ざ津兄ハはそしして必ず成ぞう
なりきり川越の重房ゟ承小渡
心添あ乃家へ きりのや色中々
さらあなぢりな神無月云く承
降魔をなし那らうや前淀の手に
やつか那を悦びいもくまで
果をさそて鎌倉に馳せ参て

ごとくハ以清くさハ橋乃ぜら井落
邦ノ庵ニまさこ三河の国や吉江
足柄箱根打過て明もやすらで
かし月夜鎌倉山にいかにしのぶ
が身限りとし思ひしより命ハ遠い
家も恩ひ称ゟ幾せしを思ひ
流き落どもしひくらましてき

数行虞氏がなんだ落あめさらん
しき歌が為乃そう四面ソし
娘野乃嵐ぞうちはとうし通る
舞の袖思ひ乃色まや出ぬらむ
涙をそへてめぐれども桜不以落
かな文孫のれてうきなさなぐさ
舞乃袖なかはりをしてはいせしや

遠ざかん忘めや一樹の陰や
一河の水唯ゝ他生乃縁と
いふ白拍子なをうたひける
思ひの重衡いうに楽しく
琵琶を引よせ撥音し給へば又
千手ことの絃合よありし家
若巻ん凡ゝ衰松のきのよひ

来ふかく独寝の枕乃尾しよ縁
うらみて遊めも旅ふく篠月も
佳縁くかあんやよふそう於
浅きよめ成ぬ亀ふ涙よや
なかのこなんこ盃葉をやめたまのふ
浪まつ頬うからいはしなお
のもて巻ひ勅よよかの一つく

ゞ数よ恨おやしのはだものゝぬ
雪渡し　さたまへえ　手も
泡ゝ立出はの中ゝ深り発ちつわ
ぢやきぬゝ毎ひさぬり瓢游し
袖とゝ濃淋遊なみゝざ巻
重溯展お方ゝ様めもおてゝ揃ぬ
巻し渋り瓢ゝ